

〈生活防災〉の思想

— 生活文化としての減災を構想する

矢守 克也

Written by Katsuya Yamori

〈生活防災〉とは何か？

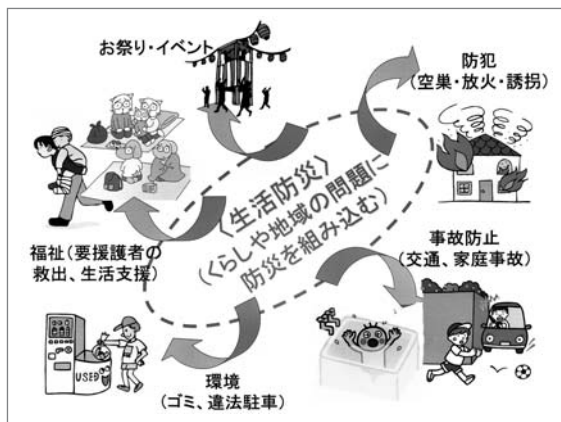
〈生活防災〉は、筆者がかねてより提唱してきた防災・減災実践に関する基本原則の一つである。

〈生活防災〉とは、一言で言えば、生活総体（まるごとの生活）に根ざした防災・減災実践のことであり、生活文化として定着した防災・減災と言ってもよい。すなわち、〈生活防災〉の考え方は、防災・減災を日常生活の他の領域とは無関係の独立した活動とはとらえない。むしろ、日常生活を構成するさまざまな諸活動—たとえば、家事や仕事、勉強はもちろん、高齢者福祉、地域環境、子どももの安全といった社会が抱える諸課題に関する活動、個人的な趣味やレジャー、あるいは、地域のお祭り、スポーツイベントな

どに関する活動も含む—とともに、防災・減災に関する活動を生活全体の中に融け込ませることを重視する。

同じことを反対側から表現すれば、〈生活防災〉は、防災・減災を日々の生活習慣の中に組み込む（ビルトイン）すること、あるいは、地域社会が日常的に取り組んでいる活動の中に組み込むことを目指す。生活まるごとにおける防災・

減災、言いかえれば、他の生活領域と引き離さない防災・減災が目標とされるわけである。



〈生活防災〉とは？

〈生活防災〉の具体事例

〈生活防災〉を推進するための具体的な方法として、筆者は次のような事例を紹介してきた。

まず、どちらかと言えば、個人や家庭での生活習慣に関わる事例として、たとえば、住居内の日常的な整理・整頓がある。整理・整頓された室内は日常的にも快適であるし、災害時には落下物防止、避難路確保などに有効である。次に、家族の外出先の相互確認。これは、日常的なコミュニケーションにもなるし、災害時には安否確認作業の負担軽減となる。さらに、徒歩や自転車を活用した通学・通勤。日常的な健康増進にもつながるし、災害時には公共交通機関に頼らない移動手段が確保され、ふだんから危険箇所や利用可能な資源（コンビニエンスストアなど）を把握することにもつながる。

他方、どちらかと言えば、地域社会全体に関する取り組みとしては、たとえば、ご近所の挨拶がある。何気ない挨拶が日常的にも近隣関係を豊かにし、かつ空き巣・不審者対策ともなり、災害時には「共助」（相互の助け合い）の基盤となる。次に、違法駐輪や駐車対策。日常的にも町の美観の維持や交通事故対策などに有効であるし、災害時には道路閉塞の防止や避難路確保につながる（ただでさえ通行に困難を感じる道路に、倒壊した家屋が覆い被さってくるかもしれない。そのような道路を使って避難することができたらどうか、車椅子が通れるだろうか、消防車が入って来られるだろうか）。さらに、ゴミの減量。日常的にも資源の有効活用、環境保全にプラスとなり、災害時には地域全体の災害廃棄物処理能力に余裕をもたせることになる（比較的小規模の水害でも、ひとたび起これば、地元自治体の廃棄物処理能力の半年から1年分のゴミが出ることは、近年の災害事例が実証済）。

これらの取り組みの多くは、比較的単純である。今日からでも実行に移すことができるようなものも多い。読者諸賢におかれても、

できることからぜひ取り組んでいただきたい（筆者自身も心がけている）。ただし、〈生活防災〉の考え方を応用・展開した防災・減災の実践事例には、より大規模で、念入りに計画され、かつ長期にわたって継続されてきた事例もある。たとえば、『いのちをまもる智慧』（35〜38頁で紹介）に収められたすばらしい実践の数々、大規模マンション「加古川グリーンシティ防災会」による大胆な取り組み（58・59頁で紹介）、あるいは、『震災疎開パッケージ』（62・63頁で紹介）など、そのいくつかは本号でも紹介されているので、本稿と併読いただければ〈生活防災〉の発想を理解いただく上で助けとなると思う。

災害文化

〈生活防災〉から、「災害文化」という言葉を連想された方も多いのではないかと思う。たしかに、古来、幾多の災害に見舞われてきた、この日本列島に暮らす人びとは、世界的に見ても豊かな災害文化を育んできたと言われる。稲作を支えるための仕組みや智慧の集積、つまり、気象や農作に関する生活習慣、言い伝え、暦などは、稲作を中心とする日々の暮らしの全体が、台風や冷害といった災害をやり過ぎすための実践、つまり、〈生活防災〉とイコールであったことを示しているとも言えるだろう。

災害文化には、このように、ほぼ全国的な広がりをもつと考えられるものに加えて、特定の地域に固有でユニークなものもある。たとえば、「津波でんでんこ」（津波の危険があるときは、家族といえども気にかけて、みな「でんでんばらばら」になってでも高所への避難を急ぐべし）の言い伝えを含む津波災害文化（三陸沿岸の津波常襲地域）、助命壇や水屋など水害から生命や家財を守るための著名なハードウェアを有する輪中文化（木曾川、長良川、揖斐川の木

曾三川流域)、頻繁な台風来襲とシラス土壌を前提に、その土壌に適した作物栽培や土地の割替え制などを含むシラス文化(鹿児島県)、火山噴火がもたらす被害と恩恵との舵取りに関する知恵の集積としての火山災害文化(北海道有珠山や雲仙普賢岳の周辺地域など)などである。

災害文化、あるいは、「生活防災」と聞くと、24時間365日常時警戒態勢というせつば詰まった防災・減災一色の情景や生活を思い描く人も多いようである。しかし、たとえば、消防士の方など、防災を生業にして努力いただいている方々は例外として、こうした態度は長続きしないし、文化としても日常の生活スタイルとしても定着しない。むしろ、前記の各事例に見られるとおり、豊かな災害文化とは、災害とともに生きていく工夫の集積のことである。自然の脅威はやり過ぎ、逆に、その恵み(火山がもたらす温泉、洪水がもたらす肥沃な土壌、大雪がもたらす豊富な湧き水など)は享受しながら、災害と共生するすべのことである。別の言葉で言えば、災害文化は、自然と真つ向から立ち向かい、それを制圧しようとする「防災」の論理よりも、むしろ、自然と折りあいつつ、それがもたらす災いだけを可能なかぎり減らそうとする「減災」の発想に近いと言えるだろう。

中山間地の強靱さ

より近年に事例を求めることもできる。新潟県中越地震(2004年10月)の被災地での事例である。筆者は、研究室の大学院生(稲積かおりさん)とともに、いわゆる「中山間地」が災害に対して強靱である側面(脆弱ではない)をテーマとして調査研究を進めている。その成果はまだまとまっていないが、ここでその一部を紹介しておこう。

まず、「中山間地」には、防災・減災上、長所となる特性が―短所となる特性とともにではあるが―多く存在することをよくよく理解する必要がある。湧き水・井戸や食料(現に田畑に植えてあるもの、森林で採集できるもの、多くの保存食)の存在は、もちろん重要である。

ただし、むしろ注目すべきは、単なる環境的な特性ではなく、ライフスタイルや社会的な関係性に見られる特性である。たとえば、納屋、ビニールハウス、土間など、インドアとアウトドア半々の空間を日常的によく利用して一時的避難所として有効に活用できたこと、豪雪地帯であることから通常から日用品をストックする習慣があること、ふだんから近くの町に買い物に行くときは、一人暮らしの高齢者をクルマに同乗させて出かけるなど近所の助け合いが生活に根づいていること、あるいは、集落を出た親戚(兄弟姉妹など)が近隣の平地(都市部)に居住して日頃から交流しているため、たとえば、一時避難したり風呂を利用したりできたこと、などである。

これらの例示で、「日常的に」、「通常から」、「ふだんから」、「日頃から」という用語をあえて繰り返し用いた。それは、これらの生活習慣、ライフスタイルが防災・減災上の長所となっていることを、当事者の方々は、「まったく意識していなかった」(稲積さんが被災地の一つ新潟県川口町で得た証言)に、読者の注意を向けたかったからである。もちろん、住民の方々は、防災・減災の目的を思いつて、納屋をもち、日用品をストックし、隣近所で一緒に買い物に行き、



中越地震で避難場所として使われていた「丸車庫」(新潟県川口町)
(写真提供:中越復興市民会議 楡井将真さん、大阪大学大学院 宮本匠さん)

親戚づきあいをしていたわけではない。防災など、まったく意識されていなかった。それらは、単に「日常的に」、「ふだんから」行われていただけのことである。

しかし、無意識だからこそ強いのである。考えてみれば、自転車に乗れることでも、パソコンを使いこなせることでも何でもいい、何かがほんとうに身についた状態、自分のものになった状態とは、特段意識することなく、そのことを実行できる状態に他ならない。だから、逆説的な言い方になるが、やれ防災だ、やれ減災だ、やれ共助だ、やれ近所づきあいだ、などと声高に唱えているようでは、災害文化も「生活防災」も半人前なのかもしれない。

伝統的な災害文化から新しい「生活防災」へ

たしかに、伝統的な災害文化は長年にわたる経験を踏まえた貴重な

智慧の集積であり、本稿で紹介している「生活防災」にとっても、そこから学ぶべき点は多い。しかし他方で、それらの多くが、少なくとも現在の都市部と比べれば人口密度が低い社会、しかも、農林漁業を主力産業とする社会を前提とした災害文化であることも、また事実である。さらに、これらの災害文化には、災害現象や防災・減災に関する知識・技術を専門的に検討し保有する存在としての専門家(防災研究者、防災に関するコンサルタント業者、防災を担当する自治体職員など)が社会的な位置づけを有する前の時代に生まれたものも多い。前項で触れた中越地震の被災地の事例も、兼業農家が多いとはいえ、農業を中心とする中山間地のコミュニティにおける、(意識されざる)災害文化であった。



「町内チャンピオンマップ」のチラシ
 (「加古川グリーンシティ防災会」)

これに対して、現代の日本社会においては、都市部を中心に人口が急増し、超高層ビル、高速で走る鉄道網、発電所や大規模な工場施設など、かつてはありえなかった人工構造物も無数に存在する。逆に村落部では、過疎化によってこれまで保障されてきた最低限の防災行政サービスにも滞りが見られるなど、防災・減災が置かれた物理的環境が大きく、かつ急速に変化している。もちろん、人びとの生活習慣、家庭や地域社会に対する帰属意識、災害に関する自然科学的知識の増大と細分化など、防災・減災を取りまく社会・文化的な環境も、前述した災害文化の多くが育まれた時代とは大きく様変わりしている。

これらを踏まえれば、これからの「生活防災」を構想するにあたっては、古来日本社会が育んできた災害文化に現代的な装いをまとうせるための工夫が不可欠だということに気づく。たとえば、「加古川グリーンシティ防災会」の取り組みの一つである「町内チャンピオンマップ」(詳しくは58・59頁参照)は、物理的には近接して居住していたとしても、それぞれの個人や家庭(多くは核家族)が、通常まったく無関係にそれぞれ別々の職業に従事し別々の興味・関心に生きていくという都市部の典型的な社会構造を前提にしている。しかし、多くの場合、地域社会における防災・減災にとつてはマイナスに作用すると思われるこの特徴を、別々の職業や趣味・特技、言い換えればスペシャリティをもつ多様な人びとを大量に確保できるのが都市部の長所だととらえかえすことによつて、現代風の災害文化を構築したのと言えらるであろう。

同じような試み、つまり、現時点における生活習慣、社会構造を踏まえた上で、防災・減災上の工夫を、現代的な課題問題の解決や、各地域の地域性のプロモーションの中に組み込むタイプの試みは、他にもある。たとえば、「震災疎開パッケージ」(詳しくは62・63頁を参照)の取り組みは、災害時の広域避難(疎開)を、都市部と村落部の地域交流や地域名産品のプロモーションと組み合わせる推

進しようとしたものである。あるいは、高知県黒潮町では、津波避難の目安となる海拔表示の掲示板に地元の小学生が一つ一つ手作りしたデザインを用いたり、避難路の手すりロープに地域伝統の素材を利用したりして、地域での学校教育、伝統産業・技法の見直しと防災・減災のリンクが図られている。

まとめ―「生活防災」の5つのエッセンス

最後に、「生活防災」―まるごとの生活に根ざし、生活文化として定着した防災・減災―について再度まとめて、本小論を閉じよう。これまで紹介してきた数々の事例を踏まえれば、「生活防災」のエッセンスは、次の5項目に集約できそうである。

第1に、「ふだんの生活」。防災・減災を災害時、緊急時にのみ固有の活動と考えるのではなく、ふだんの日常生活と一体となった活動としてとらえることが必要である。むしろ、完成された「生活防災」は、それが完璧に慣習化・日常化されているために、当事者には防災・減災のためと意識されずに実現されるとすら言える。

第2に、「みんなで（コミュニティで）」。「生活防災」の一部は、純粹に個人的な生活習慣に属することがらであるが、そのほとんどは多くの人びとの共同作業として実現される。人間にとつて最大のモチベーター（あることをしようという気にさせる源泉）の一つが、哲学や理念ではなく、「（単に）みんながそうしているから」であることにも注意したい。

第3に、「繰り返し（毎日、毎週、毎月、毎年）」。これは、「ふだんの生活」の言いかえでしかないが、「生活防災」の導入時には有効な指針となる。すでに、十分安定的に繰り返されている行事やイベントに防災・減災を組み入れることは、翻って、防災・減災そのものの習慣化を促す。

第4に、「一石一鳥」。防災・減災のためだけに、あることをしろと言われても、多くの人は躊躇してしまう。むしろ、当面の御利益は他にあつて、防災・減災は「おまけ」としてついてくるくらいでないと、人びとは乗ってこない。その意味で、「生活防災」では、防災・減災の作業と同時並行可能なパートナー探しが肝心である。

最後に、「〔当地主義〕」。「生活防災」のベースとなるのは、「ふだんの生活」である。そして、「ふだんの生活」は地域により時代により、大きく異なる。その意味で、「生活防災」は、地域特性、時代特性にフィットしたものでなければならず、同時に、それらの変化に適応することができるよう十分柔軟でなければならぬ。

今を去ること15年前、阪神・淡路大震災は、防災・減災の土台は、どこからともなく駆けつけてくれる「サンダーバード（国際救助隊）」〔※〕ではなく、日頃の生活であること、また、ふだんの社会のありようであることを教えてくれた。「生活防災」の思想が、実り豊かな防災・減災実践をさらに生み出す土壌となることを願いたい。

CEL

〔※〕1965年にイギリスで制作され、日本のテレビでも放映された人形劇特撮番組。国際救助隊は、世界各地で発生する災害などによって危機に瀕した人々を、スーパーメカを駆使して救助する秘密組織。

参考文献

矢守克也「生活防災のすすめ―防災心理学研究ノート」ナカニシヤ出版（2005年）
矢守克也「防災人間科学」東京大学出版会（2009年）

◎矢守克也（やもり・かつや）

京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授。1963年生まれ。88年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。同年（財）集団力学研究所研究員、90年関西女子短期大学専任講師、94年奈良大学社会学部助教授、97年 Johannes Kepler University (Austria) 客員教授、03年京都大学防災研究所巨大災害研究センター助教授などを経て09年より現職。主な著書は、『クロスロード・ネクスト』（共著、ナカニシヤ出版）、『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』（共著、ナカニシヤ出版）、『夢みる防災教育』（共著、晃洋書房）など。